



# 国際化の最前線から

## 国際化の最前線から



### コロナ禍に 国際交流の新たなチャンスを見出す ～第2回 コンテンツの共創で、新境地を開く～

株式会社電通 パブリック・アカウント・センター 有賀 勝

ラグビーワールドカップ2019と東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会は、日本中の多くの自治体が海外のスポーツチームと直接つながる貴重な機会となった。コロナ禍という未曾有の事態に直面しても、知恵を絞って価値あるレガシー交流を続けている自治体の取り組みをご紹介します。

ラグビーワールドカップで強豪ウェールズチームの事前合宿地となった北九州市。交流の工夫を重ね、公開練習は市民1万5,000人でスタジアムが満席になる盛り上がりを見せた。この関係性を将来に残すべく、翌2020年2月に副市長一行が渡航してウェールズラグビー協会(WRU)とレガシー協定を結んだ。

しかし、コロナ禍によって一転先行きが不透明に。市は培った関係性を教育分野で活かすことにした。WRUは障がいの有無や年齢などを乗り越えて、誰もが楽しめる「ミックスト・アビリティ・ラグビー」の普及に熱心に取り組んでいる。市内の特別支援学校で実践してもらったこともあり、その高い教育的価値を実感していた。

来日がかかわなくても継続できないだろうか。市はWRUに子ども向けの紹介映像の制作を依頼したところ、ロックダウン中にも関わらず快諾を得た。市内の小学校でこの映像を活用した授業を実施し、好評を博した。レガシー協定締結1年目、2年目の節目にはオンラインを組み合わせた交流行事を行い、再来訪が可能になるタイミングを双方で待っている。

東京パラリンピックでアイルランドチームの事前合宿地となった成田市は、「音楽」に活路を見出した。

両国を代表する民族楽器の第一人者に、交流のテーマ音楽の共同作曲を依頼。「PARA Beats! Ireland and Narita in harmony」と名付けたその音楽を、2021年2月に実施したアイルランドを回線で結んだハイブリッド

型イベントで、両国の障がい者ユニットも含む多様な人たちが共演。8月の事前合宿では地元の中学校の吹奏楽部が、陸上競技場の観客席からテーマ音楽を演奏し選手団を歓迎。グラウンド上の選手たちから歓声があがった。

2021年11月に催したハイブリッド型交流イベントで、成田市はアイルランドパラリンピック委員会とレガシー協定を締結。ここでもテーマ音楽は人々の心をつなげた。アイルランドチームのCEOは音楽に「鳥肌が立った」とコメント。市はチームが事前合宿した8月後半の1週間を「共生社会ウィーク」とし、今後もアイルランドと音楽で彩られた交流を図る計画だ。



アイルランドをオンラインで結んだ成田市のイベントで、両国の多様な人たちがオリジナルのテーマ音楽で共演した。写真提供：共同通信

#### プロフィール

有賀 勝 (ありがまさる)

早稲田大学政経学部卒。米国ノースウエスタン大学ジャーナリズム大学院修士課程修了。マーケティング局で国内外のプランニング業務に従事。営業局、新聞局、東京オリパラ局を経て現職。国際大学 (IUJ) でマーケティングを講義。著書に「未来志向のマーケティング戦略」(ダイヤモンド社、共著)、論文に「地域に残すオリパラレガシー」(時事通信社) など。